

術後に大腿骨外側顆の骨変形を伴う外反型変形性膝関節症を呈した小児外側円板状半月板の1例

○前田 圭祐^(MD) (まえだ けいすけ)¹⁾, 望月 友晴^(MD) ¹⁾, 谷藤 理^(MD) ¹⁾, 佐藤 卓^(MD) ²⁾

¹⁾ 新潟大学医歯学総合病院 整形外科

²⁾ 新潟医療センター 整形外科

【はじめに】

小児外側円板状半月板の術後経過は、一般的には予後良好であると考えられており、当グループでの多施設共同研究でも術後のフォローアップ期間が短い症例が多数を占めていた。今回、6歳時に亜切除を施行され、術後に大腿骨外側顆の骨変形を伴う外反型変形性膝関節症(OA)を呈した1例を経験したので報告する。

【症 例】

6歳時に右外側円板状半月板に対し、他医にて前節から中節にかけての半月板亜切除術が施行された。その後は疼痛、腫脹は認めず体育も可能であったが、ひっかかり感の改善がないため近医受診した。骨変形を伴うOA変化を指摘され、11歳時に当院受診した。MRIで大腿外側顆の遠位部から後方にかけて広範な軟骨欠損と骨変形、脛骨側の軟骨欠損、X線で外反型変形性膝関節症(FTA 164°)を認めた。軟骨は広範にOA変化を呈しており、軟骨移植では対応困難であった。アライメント矯正がまず第一と考え、成長期であることを考慮し、脚長差や、骨切りのような骨彎曲部位を作らない成長抑制術を選択した。変形の主座は大腿骨外側顆であったので、大腿骨内側に8-plateを設置した。術後は緩徐にアライメント全体の矯正が得られ、健側と同等の荷重線通過部位が得られた術後1年にプレートの抜釘を施行し、脚長差はなく予定通りの矯正が得られた。現在軟骨の自然修復を期待し経過観察中である。

【考 察】

小児外側円板状半月板の術後は高度変形を呈する症例もあり、患者の予後を大きく左右する。低年齢の手術には慎重な対応が必要であると思われた。